

会議結果報告書

令和8年3月6日

会議の名称	令和7年度 第4回 舞鶴市発達支援体制検討会議
種別	<input type="checkbox"/> 附属機関 <input checked="" type="checkbox"/> 懇話会等
開催日時	令和8年1月29日(木) 14時00分～16時00分
開催場所	舞鶴市中総合会館3階 集団健診室
出席者	委員:小谷裕実、村田淳、四方あかね、橋本由紀、阪口靖敬、金子亜佑美、石黒健太 関係者:内藤信雄、仲川真広、足立典子、梅田めぐみ、村尾茜 事務局:瀬野勝久、尾橋淳子、飯田美和、野田諭史、鎌部晶子、後野香織、小森昌子、栢分美香、真下知子、内藤恵美
議題	(1) 第3回 舞鶴市発達支援体制検討会議の報告 (2) 連携と適切な役割分担について ①連携を推進、持続する方法について ②発達支援体制におけるコーディネート機能の持ち方について (3) 令和7年度会議まとめについて
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 部分公開 [理由]
傍聴者数	1名
審議結果及び主な意見等	別紙参照
会議録の作成様式	<input type="checkbox"/> 詳細 <input checked="" type="checkbox"/> 要約
備考	

担当課	舞鶴市 健康・こども 部 こども家庭しあわせ 課 TEL (0773) 68 - 9155
-----	--

令和7年度 第4回 舞鶴市発達支援体制検討会議 議事録【要約版】

1. 開催概要

日時:令和8年1月29日(木) 14時～16時

場所:舞鶴市中総合会館

参加者:(敬称略)

委員:小谷裕実、村田淳、四方あかね、橋本由紀、金子亜佑美、石黒健太、阪口靖敬

関係者:内藤信雄、仲川真広、足立典子、梅田めぐみ、村尾茜

2. 議事

議題①：連携を推進、持続する方法について

提案内容:

連携を推進・持続することは、特定の人や機関で進められるものではないため、連携のしくみを構築する。

連携のしくみの3つの柱:

- 交流や見学、ラウンドテーブルミーティングなどを通じて、関係機関同士の相互理解を深め、顔の見える関係を構築する
- 関係機関の間で連携ができていない部分と不十分な部分を明確にする
- 連携の方法を見える化する(いつ・どこで・だれが・何をする)

【意見交換】

- **3つの柱以外に必要なこと:**
 - 各関係機関の機能強化が必要であるが、これを個人の意識や工夫だけで補おうとすると疲弊してしまう。こどもを育て、教育して社会に送り出していく地域社会の強化ということに、新たな一手を打つ時には、行政的なバックアップが求められ、行政的にも各セクションの機能強化をどのように図っていけるかが重要となる。
- **相互理解の推進・連携機関の追記修正:**
 - 高校と支援学校ではいろんな関わりで連携しているので矢印を追記する。
 - 京都府教育委員会には、府立高校から支援が必要な生徒を報告し、状況に応じて支援教員の配置等がなされている。府立高校が京都府教育委員会と直接的な連携が取れる機会は、研修会で指導助言を受ける時や各校への指導主事訪問があるが、機会は少ない。
 - トータルサポートセンターへの高校からの相談が少なく、利用促進を提案された。
 - 放課後等デイサービス事業所間での情報共有は行われているが、相談支援専門員が不足しており、個々の連携になっている。放課後等デイサービス事業所と日中一時支援事業所は連携をとっており、矢印を追記する。
 - 相互理解のためには、小学校から中学校等大人に向かった一方通行の矢印だけでなく、中学校から小学校などへの「逆向きの矢印（発信）」や相互学習が必要である。
 - 医療の立場から、幼児期から成人期まで、支援が必要なこどもにどのように気づき、評価・支援が開始されていくのか。支援が始まるまでに時間を要するケースがある。連携の前(支援につながるまで)の過程に課題はないか。

⇒基本的に全職員が気づいて評価する役割を担っているが、学校や職員の状況により様々な現状である。また、見立てをしても発達検査では見立てどおりでないこともあり、そういう経験を教員も積まないといけない。研修のあり方と頻度、人材を網目のように張って気づいていくようにしていこうというところだ。

- **早期支援の重要性:** TSCから相談がないという意見がでたが、相談があっただけから行くのではなく、小学校に入り込んで、相談しながら気づき、早期に手立てを打つ伴走型の支援が望ましい。園でも、職員が気づいていることもあれば、健診や保護者の訴えから気づくこともある。職員の資質向上と外部カウンセラーの活用も重要だ。
- **連携プロセスの周知・活用方法（特に中高生世代）:**
 - 幼児期に気づくと、支援者と保護者がつながっていることが多い。一方、中高生以降に気づく場合、保護者は情報がなかったり、どこかにつながることに慣れていなかったりするので、中学校、高等学校への幅広く頻回の周知が必要である。生徒指導の連絡会議など、特別支援教育コーディネーター以外にも学校現場への周知チャンネルの強化が重要である。
 - 学校と家庭の間に入り、共通認識(同じ土俵に立てる)を持てるよう調整する医療側の役割も重要である。役割遂行のためには、受診の目的や受診に至った保護者の気持ちなどから、受診により何を持って帰ってもらうかがわかる連携の仕方が必要である。そのために、初診時の学校からの情報提供の様式もブラッシュアップが必要と考えている。

議題②：発達支援体制のコーディネート機能の持ち方

提案内容: 新たな組織・人を設けるのではなく、現在の関係機関の連携を強化し、全体でコーディネート機能を発揮する。

推進のための4つのサイクル:

- 本会議で示された方向性を舞鶴市子ども若者支援会議に報告
- 関係機関が一体となって発達支援を推進。⇒取り組みの効果や新たな課題を、地域特別支援連携会議、自立支援協議会などで共有
- 舞鶴市子ども若者支援会議などで進捗管理・評価
- 発達支援体制検討会議を行い、体制の評価と見直しを実施

【意見交換】

- **学校教育現場の課題:** 教員の研修・キャリア積み上げの難しさ、スクリーニングのノウハウ不足（特別支援教育士スーパーバイザーの活用が有効との提案あり）、発達支援の推進とともに、インクルーシブ教育を進めていくことも必要である。また、インクルーシブ教育を進める上で教員研修と同時に、子どもたちへの理解教育が必要である。
- **コーディネーターの役割と課題:** 特別支援教育コーディネーターが学校だけでなく、市全体の視野で多機関連携の核となる意識を持つことが重要である。一方、現状では兼務が多く、校内業務で手一杯になっている。また、経験やスキルにも影響される。コーディネーターの役割の幅を広げるためには、業務の見直しや人材の確保・キャリアアップも必要である。
- **保護者への情報提供:** 保護者が学校に聞きにくい情報を医療側に聞かれることがある。保護者がどんな情報を知りたいのかを会議などで情報交換し、学校側に伝えることで、学校側から教育関係の情報(通級指導教室、進路相談など)を積極的に提供

することができ、どこに相談したらよいか悩む前に保護者が考えられるようになる。

議題③:今年度会議のまとめ（就学以降の発達支援体制強化に向けた今後の方向性）

これまでの議論を踏まえ、今後の方向性は以下の4点に集約された。

項目	方向性の概要
1. 切れ目ない一貫した長期的な支援体制の構築	乳幼児期から社会に出るまで、本人の意向を尊重した一貫した支援体制を構築する。相互理解・相互交流を促進し、自己肯定感や相談スキルを育む環境作りを進める。
2. 保護者だけが抱え込まない構造設計の推進	専門職との役割の区別化、社会資源を利用しやすい仕組み作り、ペアレントトレーニングなどの知識習得機会、保護者同士の交流の場作りを推進する。
3. 専門性向上のための研修システムの再構築	多職種・多機関の支援者が、教育段階を越えた相互交流研修を通じ、共通の視点を持ち、専門性を向上させるための研修システムを再構築する。
4. 情報の一元化と具体的な連携手順の明確化	情報共有の一貫化・DX化、移行支援に係る様式の統一、発達支援ファイルの運用明確化を進める。多機関が参加する会議を定期的で開催し、顔の見える関係を大切に連携強化を図る。

【付記された主な意見・課題】

- **医療面からの連携:** 発達検査を有効なタイミングで実施し、個人情報に配慮しつつ、学校の学習支援や生活支援に役立てるための情報共有が重要である。
- **福祉サービスと会議体:** 今後、舞鶴市において国が示唆する障害児通所サービスの給付決定プロセス及び個別の支援計画の適切性を判断する会議体を設置した場合、これまでの議論と矛盾しない運用について検討が必要である。
- **表現の修正（事務局確認事項）:** 表現の統一（「仕組み」の表記、元号の表記）や、より正確な言葉遣い（「最優先」を「尊重」へ、「親の会」の定義など）の修正をする。

3.まとめ(会長)

労働関連部署を除く全ての部署で、発達支援に関する議論が実施された。学童期になってから発達上の課題に気づく事例もあることから、発達支援においては、学校や教育委員会の役割が特に重要であると認識しており、今年度は、事務局に教育委員会が加わり、連携して検討を進めてきた。

今後は、会議としてまとめられた方向性を教育長に報告し、それに基づき発達支援を推進していきたいと考えている。